バルザック『呪われた子』覚書 (二)

——愛のテーマをめぐって——

西　節夫

四

要するに、エチエンヌは早くから天上の頂に登りつめ、そこに自分の魂にふさわしい美味な糧を、陶酔させる糧を見出したのだった。しかし、そのために彼は、いつの日か、こうして蓄積された財宝が、恋の情熱によって突然心にもたらされる豊かな富といっしょになることがあれば、そのときには不幸に陥る運命にあった。(1)

『呪われた子』第二部の最も明白なテーマは、母子愛から異性愛への移行であろう。公爵夫人ジャンヌは、呪われたわが子エチエンヌが僧職につくことになっているにもかかわらず、「自分と同じようにやさしい女性」の注ぐ「愛の生命(いのち)」によって、彼が幸せになることを願わずにはいられない。(2) そのジャンヌが恐れるのは、魂と知性によって生きるエチエンヌに、急激な愛の情熱が不幸をもたらすであろうこと、すなわち、おそらくルイ・ランベール的な悲劇が生じることであって、彼女は、そのことを案じながら世を去る。だが、第二部の冒頭で、弟の横死によって城に復帰したエチエンヌと、この新相続者（正確には推定相続人）の繊細虚弱さと無垢さを熟知する侍医ボーヴールワールが、子孫の維持という、デルーヴィル公爵の要求を実現できる唯一の相手として選んだ、ボーヴールワール自身の娘であるガブリエルとの恋は、それを杞憂に終わらせるのである。

本覚書の（一）で見たように、母の死によって惹き起こされた抑制状態のなかで、「愛の欲求、すなわちもう一人の母親、もう一つの自分の魂を持ちたい欲求を覚えた」[3]エチエンヌは、それまでの海との交感から共感へと進み、遂には海と結ばれるにいたる。エチエンヌが、明らかにいまは亡きジャンヌ、すなわち恋人的母親の代替物となったこの海を、もはや「その息子ではなく、あたかもその恋人であるかのごとく愛する」ことは、フランソワ・ジェルマンが指摘している通りであって[4]、実際彼は、ときには婚約者に対するように、あるいはさらに、若妻に対する夫のように、海原に魅了されるのである。

朝まだき、まだすっかり眠ったまま起き出す婦人のように海があだめくのを見ると、彼はちょうど、若妻が悦びのもたらした美しさに包まれているのを見出した夫同然に、夢中になるのだった[5]。

アンリ・ゴーチエは、こうしたエチエンヌと海との関係について、「恋人的感情の転移により、彼はこの代替物とのあいだに、その生前には禁じられていた母親との結婚を実現している、」と見ている[6]。ゴーチエのこの分析自体に異論の余地はないが、海の心理的機能について、次のことも確認しておく必要があろう。そもそも「愛の欲求」を覚えたエチエンヌは、「文明から隔てられていて、彼と同じように花となった、そんな人間に出会うことが困難であった」[7]ままに、「大海原と共感するにいたった」[8]のであって、彼が結婚を実現している「女性的相貌」[9]の海は、まさしく恋人的母親の代替物であると同時に、それはまたすでに、――実際、そう映るように――「もう一人の自分」であり、「もう一人の母親」であるような、要するに母親的

恋人の代替物、またはそれを予示するものでもあると解されるのである。

一方、秘伝学によって、「物質を動かす思考」を見通す力を得ているエチエンヌは、[10]一体化したこの「豊穣な生命」[11]の海に、海とともに空をも動かしている「この崇高な大いなる思考」[12](cette grande pensée divine)を見るのである。そこで、「詩人にして思索家」[13]である彼の思考は、海を媒体として天上の世界に飛翔し、ときに「神にいたるまで上昇」する。[14]宇宙に関するバルザックの一元的存在論に基づいた、エチエンヌのこの飛翔について、所詮それが、母の魂との出会いを求める呪われた子の精神の旅にほかならないことは、すでに前回の拙稿で強調した通りであるが、とはいえ彼がその旅路に見出すのは、いわば作者の解説とも違って、「まだ母親を失っていなかった頃の日々」だけではない。問題のくだりをいま一度掲げよう。

> 彼にとって、星は夜の花々であり、太陽は父であり、鳥は友であった。彼はいたるところに母の魂を置いた。雲のなかにしばしば母の姿を見、彼女と語るのだった。実際、二人は天上のヴィジョンによって通じ合っていた。ときには母の声を聞き、その微笑に見とれる日々もあった。要するに、彼がまだ母親を失っていなかった頃の日々がそこには存在したのである。[15]

エチエンヌは、天空の「いたるところに母の魂を置いた」ばかりでなく、太陽を父なる至上の存在とみなすのであって、[16]彼はそこに、いわば宇宙的な家族共同体を見出し、[17]それを享受するのである。したがって、この段階のエチエンヌについては、同じくアンリ・ゴーチエが指摘しているように、「エディプス・コンプ

レックスの構成要素は、アニミスムの形而上学を通じて、二つながら、このように昇華されている[18]」のであって、「母親に対する恋人的感情は、」確かに「宗教的な崇拝に変わった[19]」ことを思わせるであろう。

しかし、この見事な昇華転移も、エチエンヌが現実の父デルーヴィル公爵の相続者として、城館に戻ることによって、ただちに変容せざるを得ない。亡母の部屋に住むようになったエチエンヌは、ひたすら「そこに彼女を甦らせ、彼女と語り、その言葉に耳を傾けるのだった。こうして彼は、決して涸れることのないその泉で渇をいやすのだった[20]。」彼が父公爵に真っ先に告げるのは、「ここでしか生きられない[21]」（傍点筆者）ことであり、さらに彼は、健康を案じたボーヴールワールが、戸外の散策をすすめるのに対して、「ここは実に広い。母の魂があるのだから[22]」（傍点筆者）と釈明する。こうして、現実社会に復帰したエチエンヌにとって、ジャンヌの思い出に満ちた部屋が、天上に代わって、広大な母の魂のありか、即己れの生き得る唯一の場となるのである。

エチエンヌが、こうして再び母親への偏執にとらわれたとき、彼の前にガブリエルが登場する。すなわちエチエンヌは、亡母の部屋の窓から、その日、いままでになく美しかった海が暮れてゆくさまに見とれながら、「あれこそぼくの婚約者、唯一ぼくの愛するもの！[23]」と心にいい聞かせたあと、恋の夜明けを待ち望む鄙歌の一節を歌う。すると、ガブリエルがそれに唱和する――これが二人の出会いの場面の発端であるが、その準神話的な、周到な設定自体すでに、彼女がエチエンヌの錯綜したコンプレックスに応え、彼の欲望のすべてを満たす存在であることを告知していると思われる。ガブリエルは第一に、エチエンヌと同じように虚弱で、過敏で、無垢であり、魂の力が肉体を殺しかねない、要するに、無知無学という対照的な相違点を

除けば、彼とそっくりの人物であるばかりでなく、第二に、ジャンヌの生前を知る者が驚くほどその面影をも宿し、第三には、象徴的な特徴として、海底の真珠を思わせる目の色、肌つや、魂の優美さまで具えた乙女である。そんなガブリエルが、エチエンヌにとって、そもそもナルシシスムを満たしてくれる対象であった海、そして、母親の死と愛の欲求を境にして、第一義的に恋人的母親の代替物に変じると同時に、母親的恋人を予示するものともなった海を介して現われるからである。しかも歌唱の効果は、ガブリエルの情念と存在を、聞く者の耳に、いっそう霊化して伝えるに違いない。

実際、エチエンヌはガブリエルの歌声を、「海から姿を見せたセイレンのたぐいのものと思いなしたい誘惑に駆られる」[24]のであり、さらに、彼女の衣ずれの音を耳にしても、危惧していたように怯えるどころか、「かつて母親の訪れが生じさせた、あの心の鎮まる感動を身内に覚える」[25]のであって、遂に彼は、月光に照らされた海を見ながら、次のように叫ぶのである。

「大海原がぼくの魂のなかに入ったのだ！」[26]

神話的思考に支えられた、牧歌的情景とはいえ、エチエンヌのこの叫びは痛切に響く。二人の出会いに先立って、ガブリエルの肖像が描かれているから[27]、読者は彼女が、愛における呪われた子エチエンヌの救済の天使的存在であることを知っている、というよりも理解している。だが、この時点のエチエンヌは、ボーヴールワールから、ガブリエルが極度に過敏なことと、さらに彼女が真珠にたとえられるような娘であること

を聞かされている以外には、その容貌についても人となりについても、定かにはまったく知らないに等しい。ただ彼は、海から、あたかも母親に送られてきたかのような女性の出現によって、ようやく海の代償機能が停止するであろうことを、ただちに予感した、いや、確信するのであって、くだんの叫びはその表明にほかならない。

ところで、バルザックは、「哲学的研究」叢書版（一八三七年）にいたって、ガブリエルの出産が原因で早世するボーヴールワールの妻ジェルトリュードを、その昔、デルーヴィル公爵が娼婦ベル・ロメーヌとのあいだに儲けた子供ということにした。その結果、それぞれ公爵の息子と孫娘に当たる、いわば一世代ずれた異母兄妹同士が愛し合い、結婚しようとすることになったのである。フランソワ・ジェルマンによれば、バルザックが「大学者」の娘と封建領主の跡継ぎ息子との結婚問題を取り上げたことには、七月革命以後、サン＝シモン、ラムネー、ユゴー、ヴィニー、コントなどによって唱えられた、知性による貴族階級の権利要求の「反響、といっても控え目なそれが」認められるのだが[28]、結局、「王権と教会の擁護者」というバルザックの政治的立場に加えて、その貴族コンプレックスのゆえに、ガブリエルに貴族の血を持つ母親ジェルトリュードをあたえることにより、エチエンヌとの身分違いを緩和するにいたった[29]、という。しかし、ジェルマンのこの所説は、追加設定の真の意図を誤解した、およそ無用の推理ではないだろうか。ジェルマン自身が同時に指摘しているように、第二部の主人公間の身分違いの緩和だけが問題であれば、ジェルトリュードの父親をデルーヴィル公爵以外の大貴族にすることで事足りたはずである[30]。にもかかわらず、バルザックは、『ステニー』(Sténie ou les Erreurs philosophiques) 以来、彼にとって親しいテーマであった「兄妹のような

恋人たち」(les amoureux presque fraternels) のそれに戻るのであって[31]、新設定の意図は、なによりも、エチエンヌとガブリエルの相似性に血縁の裏付けをあたえ、彼らの恋の自然さを強化することにあったと考えられるのである。

ともあれ、ガブリエルについて、作者が強調しているのは、公爵との血縁よりもはるかに、公爵夫人とのいわば架空のつながり la filiation imaginaire であろう。公爵に認知を拒まれたまま、孤児になったジェルトリュードは、ジャンヌの叔母が院長である修道院に引き取られ、そこで生涯をすごす運命にあったが、彼女に寄せるボーヴールワールの真実の愛に同情したジャンヌが、持参金を提供して、二人を結婚させる。ジャンヌとジェルトリュードの、「この一種の養子縁組のおかげで、血縁による公爵の孫娘ガブリエルは、さらにまた、公爵夫人の心による孫娘である」こと、それはジェルマンが指摘している通りであって[32]、しかも現実の血縁関係とは逆に、公爵夫人の実の孫娘であるかのように、彼女はジャンヌに似ているのだ。すなわち金髪で、華奢で、ほっそりした体つきをし、青白い顔には苦悩と愁いから生まれた神秘な優美さがある。ひと言でいえば天使的風情の持主であって、趣味においても同じように、花と音楽を愛している。

(四章末了)

〔注〕

(1) L'Enfant maudit, La Comédie humaine, nouvelle éd. de la Pléiade, 1979, Gallimard, t. x, p. 906. 以後、バルザックの作品その他で、この版によるものについては、巻数と頁だけを注記する。
(2) Ibid., p. 903.
(3) Ibid., p. 912.
(4) François Germain: Honoré de Balzac, L'Enfant maudit, édition critique établie avec introduction et relevée des variantes par F. Germain, 1965, Les Belles Lettres, pp. 63—64.
(5) L'Enfant maudit, t. x, p. 914.
(6) Henri Gauthier: Introduction à L'Enfant maudit, t. x. p. 854.
(7) L'Enfant maudit, t. x, pp. 912—913.
(8) Ibid., p. 913.
(9) Ibid., p. 913.
(10) Ibid., p. 906, p. 909. を参照。
(11) Ibid., p. 913.
(12) Ibid., p. 914.
(13) Ibid., p. 905.
(14) Ibid., p. 914.
(15) Ibid., p. 914.
(16) Ibid., p. 915. を参照。天上に飛翔した、つまり肉体の微粒子化したエチエンヌが太陽を父とみなす一方、岩穴で、もれ日のあたたかさにまどろんだ生身の彼に、時間の経過を教えてくれるのは、「至上の存在である太陽」である。

(17) H. Gauthier: op. cit., p. 855. を参照。
(18) Ibid., p. 855.
(19) Ibid., p. 855.
(20) L'Enfant maudit, t. x. p. 937.
(21) Ibid., p. 921.
(22) Ibid.. p. 937.
(23) Ibid., p. 938.
(24) Ibid., p. 938.
(25) Ibid., p. 939.
(26) Ibid., p. 940.
(27) Ibid., pp. 926—933. を参照。
(28) F. Germain: op. cit., pp. 95—96.
(29) Ibid., p. 96. を参照。
(30) Ibid., p. 96. を参照。
(31) Ibid., p. 96. を参照。
(32) Ibid., p. 97.